

トワイライト氏のとある一日

(いかにして彼らは争いをやめ、蟻の巣の型を取るに至ったか)

その日は朝から雨だった。

目覚めてそれを知覚したとき、おそらく当分降り止まないと思感する類の。豪雨ではなく、静かに長く降り続く雨粒の帳が森を包んで光を遮っていた。

雨の日は怠い。目を擦りながら泣き上がり、しかし雨ならば梟が来ないということで、落ち着いて本が読めるのではないかと考える。ならば時間を有効に使おうと、ときばき身支度を済ませて部屋に戻ると馴染みの封筒があった。溜息とペーパーナイフの出番だった。

トワイライトが適当な頃合いで傘を差して外に出てみると、井戸端にはそれぞれ似合いの傘の下に例の親娘が立っていた。濡れていたら笑ってやろうかと思つたが当てが外れた。雨の日に会つたことはなかつたのでどうするのだろうかと思つていたので抜かりはないということか。これでまたひとつ謎が解明された。念の為に傘は一本、一番大きいのを手に持つてきてほしいのだが、それは間違つてもあの女と肩を並べて同じ傘などに入らないからである。かと言って譲つてやつて自分が濡れるのは馬鹿らしいし、もし小夜啼鳥がいれば彼女に貸してやろうと思つて持つてきただけだ。まさに降らぬ先の傘。合理的判断であつて断じてあの女の為ではない。

予備として置いてある古い傘を差しながらトワイライトはそ

う胸中で落ち着いて誰かに説明した。イドは知らん顔していた。小夜啼鳥はドレスのような凝った外套と揃いの可愛らしい真

紅の傘を軒先で畳み、彼の横を通り過ぎるとき『傘』とだけ呟いた。たぶん余つた一本についてのフォローだったのだろう。肩だけすくめて、それを傘立てに仕舞い、トワイライトは玄関を閉めた。

その後のコイントスでトワイライトが負けたので、今日はイドがゲームを選んだ。盤なしチェスなどやつたことがなかったので散々苦勞した挙句に惨敗した。要するに盤も駒も実物はなにも無して、机の上を睨んで口で指し手を言い合うだけである。とんだ神経衰弱だった。どこになにを置いたかすぐわからなくなり、頭がどンドンこんがらがってくる。イドは終始余裕でにやにやしており、どうでもいいことを明らかにわざと話しかけてくるので心底鬱陶しかった。こちらが散々悩んで一手指した次の瞬間、即座に指し返してくるのは頭にくる。痲癩を起こして気軽にチェス盤を雑ぎ払うこともできるのは、確かに非実在ならではの利点なのかもしれない。

棋譜係は普段通り小夜啼鳥が務めた。少女は生真面目な顔で役割を果たし、勝利の鼻歌交じりにイドが席を立つた後、机に突っ伏して燃え尽きている彼に小声で『健闘』とだけ呟いてその後を追つていった。トワイライトはしばらくそのまま不貞腐れて動かず寝たふりをしていた。雨は当分止まなさそうだった。

最初は雨漏りの可能性について考えていたはずだった。まだ大丈夫だが、またそろそろ一応見ておくべきだと予感があった。何事も早めの対処が肝心だ。だが、晴れた日には思い出さない。雨

の日には作業ができない。なので、後回し後回しになっている。よくない。

この家には物持ちの魔法がかけてあるが（父は梟にうまいこと言つて望みの魔法を引き出すのが非常に上手かった）、それでもこんな場所に何十年と建つていけば建物は老朽化する。時々彼が修繕するが、屋根裏が今どうなっているのかはかなり怪しいところだった。

屋根に穴が開き、天井を突き抜けて雫が部屋に垂れるところを想像する。密やかに一粒。やがてそれは滝になり絶え間無く流れ落ち何もかも水の中に沈める。空想の中の自分は呑気に寝ていたので、もれなく水葬された。梟がやってきて窓を開けると、勢いよく水が溢れ出してしっちゃんかめっちゃんになる。めでたしめでたし。

その考えは順路だったのか、それとも気を逸らす為の回り道だったのか。どうにも、その判断はつかなかった。もしかすると自分は最初からそのことばかり考えていたのかもしれない。

しかしそんなことはあまりよろしくない。認めるべきではない。だが気付いてしまえば頭から離れなかった。今から一分間決して白熊のことだけは考えるなど言われれば、人は白熊のことしか考えられなくなるという。白熊とはなんだろうか。氷の世界に棲む熊など本当にいるのだろうか。そもそも、氷の世界とは。《森》の最奥を越えればそこは雪と氷の国だと聞くが、その王様は白熊なのだろうか。なにもかかも眉唾だ。この国が外界から鎖され

て五百年だ。《森》の果てなど、本当にあるのだろうか。

そこまで考え、所詮は白熊のことではなくその芯ではやはり別なもののことを考え続けている自分を発見したトワイライトはさらに五分悩んだ。その間何度もその考えを追い散らそうとし、そして失敗し、とうとう口を開いた。

「なあ」

イドはこちらを見ることがもなく即答する。

「なんだ」

「いやどうでもいい話なんだけどな」

イドは目も上げなかった。つまらなそうにまた即答する。

「なら遠慮しろ。今本読んでる」

「そうか」

それは見ればわかることだったし、確かに自分は非常にくだらないことを話そうとしていた。それを承知しているトワイライトは頷き、大人しく引き下がった。

その後はまたしばらく、雨の音だけが響く。さらに耳を澄ませば、一定のペースでイドが頁を捲る微かな音。沈黙に身を浸し、トワイライトは邪念を追い払おうとした。そしてきっかり五分後にその戦いに敗北してまた口を開いた。

「あんな」

「なんだうるさい」

「蟻の話なんだけどよ」

イドは目を上げず、表情も変えず、頁を捲る手も止めなかつ

た。ただまったく調子を変えずに平坦に即座に聞き返してくるだけだ。

「どの蟻」

「いや普通の蟻……あなたなんか前言ってたなと思ってよ」

「普通とは。そしてなにを」

「蟻の話したじゃん。俺んちの玄関のとこの蟻の巣見たときさ」

「なんの話をした？」

「だからさ！蟻の巣に鉛流して型取ったら面白いとかどーのこーの！言つたら！絶対言つた俺は確かに聞いた、お前が言つた！」

明らかに無関心な相手に、こちらも歯切れ悪く話していたのだがとうとう気まずさに耐えかねトワイライトが照れ隠しに声を大きくすると、イドは目を上げないままで気のない声を上げた。

「あー」

納得したらしい音。頷く仕草だけ見せる。また頁を捲る。

「言つた言つた。それが何か？今関係あるのか？」

「いやだからな。それさ」

「なに」

「あのときは却下したけど」

「ああ」

「面白そうだなと思って」

「よし良かった」

ぱたん、と本を閉じたイドが即座に言つた。次いでびしっとこちらを指差してくる。ものすごくやる気に満ち溢れた顔で。

「なんだお前興味があるのかそういうことは早く言え！なぜあのときは遠慮したのだ」

トワイライトは洗面のまま、慌てて念を押す。

「いやあのな、まだやるとは言つてないから。ただ面白そうだなーと思つたと言つただけだからな。そこ誤解すんな」

「一見の価値はあるぞ。このあたりにはいかにも大きな蟻の巣がありそうだし……面白いぞ」

自信満々にやりと笑われれば、踏み出しかけて宙に浮かしていた片足を、そろそろどこかへ動かさざるを得ない。短い間悩んで、トワイライトは戻る方ではなく進む方へと忍び足で半歩進んだ。できるだけつまらなそうな顔のまま。ごくりと唾だけ飲んで、呟く。

「……それさ、ちなみにどんな感じなん。ちよつとあなた絵でも描いてみてよ」

「ゴソツと掘り出せるぞ、ゴソツと。あれは実際やつてみないとわからないよなあー」

怪しげな手つきでにやつき、模範的悪者の顔をしているイドに紙と鉛筆を無理矢理押し付ける。断じて露骨に興味を持つているような顔をしてはいけない。まだ引き返せるはずだ。しかめっ面でトワイライトは命令した。

「まず絵を描け！下手でもいいからとりあえず雰囲気掴めりゃそれでいいから！どういふふうになって出てくんさ」

イドは慌てるでもなく、素直に筆記具を受け取ると少し考えて

手早くいくつかの図を描いてみせてくれる。

「蟻の種類や巣によつて形はかなり変わるからな……絵に描けと言われると。ふむ。まあ、こういうようなのとか、こんなのとか、もっと変わった形のもいくらでもあると思う」

それを見て、トワイライトは皮肉ではなく首を捻る。

「なんかよくわかんねえなあ。巣の絵とえらい変わらん」

「私の腕の問題ではない！もともとなんだかよくわからん形のもが出てくるのだ。しかしアーティスティック。驚くぞとにかこの細い線が通路。膨らんだ部分が部屋。これらが地下に向けて枝分かれしつつ伸びていくのがまず基本で、そこから通路が複雑化してまるで茂みのようになっていたり、部屋の数が多く珊瑚のように広がったものもある。通路が非常に長く部屋を挟み幾度も折り返し、あたかも高層建築物の非常階段を思わせるものも……多様化していて絵では説明しにくい。雰囲気だけ掴め」

幸い、イドはさほど怒らなかつた。真面目な顔で鉛筆の先で図を指し示しつつ、説明してくれる。トワイライトは身を乗り出して紙の上を指差した。

「これ縮尺どれくらい？原寸だとどれくらいの深さまであるの」

「二メートルはまずある」

「そんなにあんのかよ！」

彼が驚きの声を上げるとイドは期待通りといった顔でにやつと笑った。

「だから掘るのがまた大変でな！まあナイトがいるからなんとで

もなるけどな。石膏でも型は取れるが、土から外すとき割れるからな。流すのは金属がいい。透明樹脂でもまあ面白いが金属の方が存在感があるし壊れにくいしいいと思うね。これに關してはさ」
そう言われて、はつとしてこれはいかんと考え直す。腕組みして顎に手を当て、トワイライトは必死に大人としての良識を呼び覚まそうとする。

「鉛……鉛か。でも中毒とかよくないよな。うちの庭で熔かすのはやっぱアレだよな、しかも土に流すのもたぶんよくないか。汚染とかあるよな」

今は平気だが幼い頃は喘息持ちだった。それを思い出せば得体の知れない煙というのは身体によくない気がする。そうだ。よくない。幼稚な邪念とは手を切るべきだ。自分は大人である。従つて客がいるときは紅茶にも砂糖を入れない。ただし珈琲は最初から家に置かない。苦いから嫌いなのだ。砂糖だのミルクだの入れているところを見られたら負けな気がする。いやそんなことはどうでもよかつた。とにかく子供じみたことはするべきではない。たとえ少々世の中からは省かれていても、自分はれっきとした大人なのである。蛇の誘惑に負けてはならない。

「鉛は気化したのを吸うと多少体内に蓄積されるが……まあ、一度熔かす程度なら防毒マスクがあればさほどのものでもないのでは。気休め程度にはなるので手拭いでもぐるぐる巻いとけ。まあ土壌は汚染されるかな。アルミニウムは手に入らないか？」

しかしイドの話について耳を傾け、未知の単語が出てきた時にそ

の努力のつつかえ棒はうつかり外れた。顔を上げて聞き返してしまっ。

「アルミニウム？ごめん知らん」

「あー、電気分解がいるからまだ生産されてないのかな。存在自体はしてそうなんだけど」

イドはなにかひとりり納得し、彼と似たような格好で腕組みした。

「アルミニウムの方が軽いし……害もないし、融点も六六〇、三度だから溶融させるのもまあ、なんとかなるだろう。私が都合をつけられんでもないが」

イドが勧める点を考えれば確かにそちらの方がいいのだろう。だが聞いたこともない名だった。若干迷ったが未知の金属については一旦置いておくとして、これまで自分が考えていたことを話してみる。

「鉛は焼き火で熔けるよな。とりあえず鉛の屑鉄掻き集めて鉄の鍋に放り込んで銹漬すかと思っただけどよ。魚釣りの重りとかさ、たぶん探せば家にも多少はありそうだし、銹掛屋と……鍛冶屋に知り合いいるからそこに頼めばなんかあるよな？」

イドは鷹揚に頷いた。普段なら腹の立つことも多い仕事だが、今だけ妙に頼もしく見えた。

「疑いない。刀鍛冶なら間違いないとくさん持っている。これで買ってこい。釣りはいらぬ。ちなみに、先程の屑鉄という言葉、ナイトに対して悪意的に使うと最大級の侮辱と受け取られその場

で殺される可能性があるので注意した方がいいぞ」

イドは長いスカートのポケットから取り出したものをすいと机の上に置く。暗緑色の天鵞絨でできた小袋。口は紐で閉じられており、大きな割にひどく重そうだった。中には先程の賭けでベットした金貨がそのまま入っている。

滑らすように押しやられたそれを受け取りながら、トワイライトは頷きつつも訝った。

「そうなのか？わかった。でも変なところが気になるんだな」

「屑鉄、ボンコツ、役立たず。この辺りの暴言は絶対避ける。あれにも色々あるのだ。まあ、お前がそんなことを言うとも思わんが。まあ一応な」

イドは真面目な顔をして指折りそう言った。その目つきはいたってまともで、嫌味を言う様子でもなかったのでトワイライトも素直に頷いた。

「わかった。覚えとく。んでよ、鉛の話なんだけどな、どれくらい要るんだ？えらく気前良く金くれたけどよ」

頷き返すイド。

「こちらでの相場がどれくらいなのかよくわからんからな。まあ所詮は鉛だし、さほど高価なものもあるまいが。量は……液状で一五〇〇から二〇〇〇ミリリットルは欲しいな。巢の大きさが未確定だし余るならそれでいい。むしろこれでは少ないかもしれない。念の為に三二八ミリリットルとするとどうだろう。端数はうちの今日の暦であって、あまり意味はない。こういうものは

出席番号か日付かで選ばれると相場が決まっているのだ」

「重さで言うとう？」

「鉛の密度は一一・三四g/cmだ」

「てーと……約三十五、五キロか!? くっそ重いな。そんなに要らんかい」

暗算の結果に彼が驚いて大声を出すと、イドはどこか満足そうな態度でにやつと微笑んだ。

「街からここまでどうやって持つて来る気だ? ナイトを貸すか?」

確かに有難い提案だったが、トワイライトは渋い顔になる。

「さすがにそれは酷いだろ。ちっさい女の子に鉛担がせて俺手ぶらかい。鬼か。いやまあ、それくらいなら俺も持つてくればさ。でもやつば怠いし、どうせ街まで出るなら他のもんも買いたいし、

こっちはこっちで都合つけるよ。そこは心配しないでくれ」

獣道を鉛塊背負って歩いてくるのも馬鹿らしい。街からここまで、入れ替えの魔法で転移させよう。

それを言えばそもそも、この家自体が入れ替えの魔法でここに持ち込まれたものであるのだ。森の中に唐突に建っている小さな一軒家は、なにも知らない者から見ればひどく奇妙に思えるのではないかと彼は考える。

イドはさすが魔法使いということか、そのあたりの絡繰りはなんとなく察しているらしく、肩をすくめて笑うと小さく歌声めいたものを呟いただけだった。あまりうまい鼻歌ではないが楽しそうではあった。短い節のなかで、東の魔女が死んだ、とだけ聞こ

えた。

トワイライトは右手を軽く上げ、そんな彼女に話しかける。

「でもよ、そんな鉛の塊ってさっき言ったやり方でほんとに熔けるんかね。まあ丸ごと突っ込んで何個かの鍋で同時進行になるんだろうけど、それでもどうなんだ? あ、そうか鍋もそれ用のやつ買わなきゃ。一回やったらもう使えんもんね」

「まあ鉛なら……熔かせると思う。あと柄杓も買え。鉄も。鍛冶屋が予備ぐらい持つているだろう。なければこちらで用意もできるが」

言われたことに頷きながらも、気になっていたことにも触れる。

「なあさっき言ったアルミニウムな。一応あたってはみるよ。鍛冶屋連中なら、俺よか金属のことにゃ詳しいだろ」

しかし聞いたことのない名だった。もう少し情報が欲しいと思いい、トワイライトは頭を捻ってみる。思い当たることを尋ねる。

「それどんなもん? ひよつとして貴金属か?」

イドは首を横に振った。

「いや、卑金属に分類される。鉛と同じだ。だが珍しければ価値は上がるだろうな。製錬に多少の技術がいる。すくなくとも鉱石だけならどこかにありそうなんだが。安定した電力供給があれば大量生産可能だが、そうでないなら手間はかかるし、まだ稀少品かも」

「電気って……雷?」

今一つぴんとこず、彼がそう問うと、イドはむ、と意外そうに眉を上げる。

「この文明レベルなら蒸気機関くらいはあるだろう？ないのか？お前のところ妙に偏^{かたよ}ってるな。魔法使いが生き残ってるどころに頼るからこんなものなのかな。しかし魔法も廃^{すた}れつつあるんだろ？ややこしいな」

かるく首を傾げて続ける。独り言めいて。

「神秘と幻想を選択し肯定して、狭い範囲に隔離したはずなのにやはり駄目だったか。まあ人間は否定したがりの暴きたがり、都合のいいところだけ信じたがりだからな……あと銃火器の発達が著しく遅れてるのはやはり獣が影ながら世界を牛耳^{ぎゅうじ}っているが故なのかなとか気になってはいるのだが。まあ、やはり連中が嫌ってるんだろな。然^{しか}りか。しかし今のこの《森》とヒトとのパワーバランスだが、もし外界からの技術が入って高性能の銃器……狙撃銃、特に対物ライフルなんかが量産されたら多分一気に引つ繰り返るぞ。あれはこの魔物連中には意味的にも物理的にも相性最悪な……ん、まあそのあたりは説明し出すと話が逸れるな。また今度にしよう。アルミニウムの話だったな。とにかく、明るい銀白色の金属だ。だが現時点でお前が知らないならおそらく必要量手に入れるのは難しいのではないかな」

イドはふとなにか不穏な脇道に逸れようとしかけたようにも思ったが、案外すぐに自分で戻ってきた。なので彼も追及はしなかった。それはもしかすると、もしかすると後に彼を非常に後悔

させるのかもしれないが、すくなくとも今は些細な与太話^{よたばなし}として井戸の底へと沈んだ。彼が聞き咎めなければ、この場には他に誰もいなかったから。それは致し方のないことだ。

イドがもうすこし悪意的に言えば、もしくは面白そうに言えば引つかかったのかもしれない。だが彼女はごく普通の調子で喋っており、そこに不吉を見出すのは難しかった。だからトワイライトはすぐそれについては忘れ、目の前の未知の金属についての話題だけを聞き返した。今はそれで、なんの問題もなかった。

「明るい銀白色、か。他の特徴……重さどんくらい？」

「密度二・七〇g/cm³」

「めっちゃ軽いな。えーと。約八、四キロ？軽っ！」

彼が驚くと、イドは屈託無く笑った。

「あはは。重いのと軽いのが並んだもんなあ。極端な感じするよな」「太った猫一匹抱えてくるような感じか。あんたでも頑張りや持つて帰ってこれんじゃね？いやさすがに無理か。しゃあねえ、俺が持つわ」

「それはどうも。確かに猫だと思えば……抱えられないこともない気もするが、やはり距離があるものな。自信はない。お前に頼むとしよう。しかしそれはかなり立派な猫だな？ふざふざ猫^{メイソウ}だと想像する。長い胴体^{たてかみ}。鬚^{すげ}。アライグマの尻尾。むしろ本体はおまけ。だが値打ちのあるおまけ。プライスレス」

彼女は目を閉じて歌うように、穏やかに言う。こんな顔ならば知的で大人しそうに見える、好感が持てた。荷物くらい持つてやっ

てもいいかと素直に思える態度だった。

「難しいって話だけどき。もし首尾よく行って、手に入ったとするわな。それ熔かすのもさっきの手法でいける？ん、焼き火の炎ってそもそも何度ぐらいあるんだ？」

トワイライトが軽い銀色の金属の手触りを想像しながら質問すると、

「だいたい、七、八百度程。鉛の融点は三二七、五度だから、熔けやすい金属ではある。そして、隕石クリフトナイトから眼鏡の青年を守ってくれたりもする。透視も防ぐし。お役立ち！鉛強いよね鉛。金にも一番近くて遠い」

またよくわからないことを言っていてイドは朗らかに笑みを浮かべている。それを眺めて尋ねる。

「さっき融点何度って言ったつ。六六〇度であつてる？それならアルミニウムも焼き火でいけるってことか？」

イドは頷いたが、同時に首も傾げた。

「いや、あれは熱伝導率がかなり高いから。そりや炎の中に直接すっぽり放り込めば熔けるかとは思うんだが、大きな地金を鍋に入れて焼き火にかけてというとうなるんだろうな。かなり熱は外部へ逃げて効率が悪そうだ」

「難しいか？」

「んー……やはり面倒かもな。完全な液状にというと、うまく熔けない可能性が高い」

顎あごに手を当てて視線を空そらに据え、成功率について考えているら

しいイド。トワイライトは身振りを交えて思いつきを説明する。

「煉瓦れんがで竈かまど作つてさ、鍋も中に囲つちまう感じで作たらどうなる？あと熱を逃がさない方法ってーと、なんだろ」

「七輪しちりんがあれば手頃だが」

「七輪？」

「これくらいの大ささの……携帯できる調理用の小型炉。火鉢というか。木炭や煉炭を使う」

「あー、なんかあるな。そういうの。でもうちにはないや。梟うしとこ持つてねえかな。煉炭って普通の木炭とは違うもんか？」

尋ねればこの女はなんでも答えてくれる。小さく頷き、イドは手でいくつかの大きさを示した。

「石炭等の粉末を練り固め、着火剤も仕込んで成型したものだ。長時間安定して使える。だが今回は木炭の方がいい。燃焼温度が断然高い」

「へー。炭にも色々あんのか。石炭と木炭の違いくらいしかわかんねえや。奥深いんか」

彼が素直に感心して尋ねると、

「まあ言い出せば細かいな。そのふたつだつてそれぞれ色々種類があるしな。工業用煉炭は船舶燃料にも使うぞ。お前のところは外洋がないからあまり関係ないのだろうか」

イドから逆に問われ、トワイライトは首びくねを捻る。

「船なー。あんま知らんのよな。俺酔うんだよあんま好きじゃねーな」

「帆船には興味があるのでは？前に絵をひとつ飾っていなかっただか。今は見当たらないが」

トワイライトは渋い顔になった。頬を掻く。

「あれな……まあ、鼻がな。壊したな。でかい船の形は好きだぜ。かっこいいじゃん」

「同意だ。帆船模型とか作るか？私はポトルシップを作るのかなり好きだが」

「やりてえんだけど鼻がな。あんたどんな作るの」

彼女はまた手で大きさを示す。親指と人差し指の間、五センチほどの隙間と両手で作る一メートル近い幅の空間。

「小さいのならこれくらい……大きいのならこれくらいのを」

「すげえ！両極端だな！どうせどっちにせよそ細かいの作るんだろ知ってるぞ」

トワイライトが思わず感心して膝を打ち、明るい声を上げると、イドも嬉しそうに目を輝かせた。ぐつと拳を握って爽やかに力説する。

「当たり前だ！引き起こし法など邪道！すべて中で組み立てずしてなんのポトルシップか！そんなもののが楽しい！」

「うわー羨ましいくつそ俺も超やりたい。でも鼻が」

「なんとかならんのか？よくよく言い含めれば触らないのでは」

トワイライトは腕組みする。情けなく顔をしかめる。様々な思い出が胸に去来する。

「いやー……どうだろう……いくら納得させてもなんかありや

すぐ吹っ飛ばからな……悪気なく色々と予想外のことをしてくるからなあ。さすがに、必死に守ってきたやつ完成間近で叩き壊されたら瓶と一緒俺の心も折れるじゃん」

イドは苦笑して言った。

「まず模型を作るところから始める。瓶に入れるかどうかはそれから考えろ」

「あれって瓶の中で作るんじゃないの？」

意外に思ってたトワイライトは尋ねた。ピンセットでつまんだ部品をひとつずつ瓶の中で組み立てるようなイメージを持っていたのだが……

イドは微笑んで言った。

「最初は外で完成させる。それを瓶の口を通るサイズまで分割して、パーツごとに瓶の中に入れてまた組み立てていく」

「糊で貼るんか？」

「接着剤も使うが、糸で結ぶ」

「すげえ」

感嘆の声に、心地良さそうに頷くイド。瞼を伏せてゆったりとした笑みを浮かべている。長い睫毛が頬に淡く影を落とす。穏やかな声で、

「嵌まるよ楽しい。あとは素敵な瓶を探す楽しみも……」

そう言いかけ、ふとなにかを訝するようにイドは閉じていた目を開けた。

「……む。我々はポトルシップを作る話をしていただけだったか。

なにか違うことを話していたよな」

「蟻だ」

「それだ」

交互に小さく指差し合って、脱線に気付いたふたりは本来の目的地へと戻ろうとする。まずはトワイライトが顎に手を当て天井を睨んだ。

「えーと、アルミニウム溶かすのになにが必要かって話だったよな。どこから船の話になったっけ。ああ、炭の話か。悪い悪い」
イドもごく素直にかぶりを振った。

「いや、気にするな。私もつい横道に逸れたのだ。このあたりに
はあちこちに沼が口を開けているのだ」

「沼か」

「沼だな。うっかり嵌まると沈むぞ」

「手エ出すときには覚悟してやるわ。まあ鼻がいるから……ん、まあいいや。模型の話はまた今度聞かしてくれ。あとなにが要るんだ」

「あとは、送風機。できるだけ火力を上げる為に強い送風機が要ると思う。扇ぐだけでは足りないだろうな……」

呟きながらイドは腕を組み直し、握った拳を頬に押し当てる。

「んー。ポトルシップの話ではないが、これもいかにも有り合わせに絞って遊ぶのって楽しそうだと思うんだが……きれいに熔けなければ型取りに役立たない。それでは本末転倒というか、意味がないか。焚き火でアルミニウムが熔けるかどうかの実験に

なつてきてるよな、今」

言われてみればその通りだ。

「そだな。目的は蟻の巣だった。まあ、たぶん鉛になるよな。なかなか手に入らんのだろ？ 溶かすのも難しそうだし」

トワイライトがその話を纏めようとすると、イドはゆつくりとかぶりを振った。

「坩堝があれば問題ない。こうなればこちらで都合する。他に必要な器具及び、金属材料も私が用意しよう」

頼もしい宣言だった。そして、確信を持って彼は尋ねる。

「俺はなにすればいい」

準備は全て彼女がしてくれるのなら、なにもすることはないはずだ。だが、彼女の口ぶりからはそうではないと読み取れた。イドはこちらを見つめ、にやりと悪い笑みを浮かべる。

「無論、最も重要な役割がある。お前にしか任せられない」

金色の瞳。透き通って輝いている。自信を持ってこちらを見守るふたつの月。

「些事はこちらで引き受けた。その嗅覚伊達ではないと証明しろ。期待しているぞ」

イドは闊達と宣言し、ゆつくりと、だが力を込めてトワイライトを指差した。そして囁く。

「この庭の中で、最もユニークかつ大きく、素敵な蟻の巣を選ぶのだ」

わかっているじゃんこいつ、と思った。

軋む音。建て付けの悪い玄関が開き、兩音が強まった。椅子に腰掛けたままトワイライトは肩越しに背後へと振り返る。そういえば、いつしか真面目に背筋を伸ばして座っていた。

玄関先で傘を閉じ、小夜啼鳥が靴の汚れを拭っていた。つまらなそうに呟いている。イドの方へと。

「……戻りました。先方はほぼ眠っておりましたので、適当に置いてきました。声はかけましたが、覚えているか怪しいので念の為書き置きを残してきました」

「御苦労。濡れなかつたか」

つんと澄ました様子で小夜啼鳥は答える。

「濡らせませんでした。ご心配なく」

荷物の話か、それとも豪奢な衣服の話か。あるいはなにか別なものについての話なのか、なんにせよ小夜啼鳥は多少奇妙な言い回しで応じたが、イドはなにも言及せず苦笑気味に頷いただけだった。このふたりの間では疑問なく通じる遣り取りだということだろう。

「おつかれ。まあ座んなよ。あつたかいお茶飲むか？」

立ち上がりつつ彼が声をかければ、彼女は無愛想に小さく頷く。

「頂くわ」

食堂と続きの台所へと向かいつつ、まだ玄関で丁寧に泥の汚れを取っている小夜啼鳥へとトワイライトは気楽に言葉を投げた。

「でもよ、あいつ字読めねーんだ。氣イ遣って貰ったのに悪いな。今度からは書き置きはいいよ」

「知ってる。だからわかるように描いてきた」

こともなく答えられて一瞬、首を捻る。

「なんて書いたん？」

大人ぶった澄まし顔で、小夜啼鳥は応じた。

「秘密」

はて鳥語というやつだろうか。と曖昧に疑問を転がしながら彼がポットに茶葉を入れ替えて戻ってくる、彼女もちょうど室内へと入ってきていた。

暖炉にかけていた薬缶から湯を注いでいると、ふと小夜啼鳥がなにかに気付いたような素振りですべて首を傾げる。幾何学的なようなそうでもないような雨に濡れそぼった木のような食べ終わった後の葡萄のような変なもの。そんな凶。食卓の上に広げていた紙を見て、訝っている。

「なんの話をしたの？」

確かに、説明なしでは何の絵だかわからないと彼が思っているうちに、よくぞ聞いてくれたという顔をしてイドがきつぱりと即答した。嬉しそうにトワイライトを指差す。

「こいつがだな！ 蟻の巣に溶かしたアルミニウムを流し込んで型を取りたいと言うので説明をしていたのだよ！」

「ちよつ、待て言い出しっぺはおめーだろーが!!」

「未練たらしく今日になって是非やりたいと言ってきたのはお前

ではないか！素直になれよな！」

嬉々としているイドに慌てて抗弁していると、

「最低……馬鹿みたい。蟻が可哀想よ」

横合いから呆れ果てた調子の非難の声が上がり、振り向けば白い目をした小夜啼鳥がこちらを見ていた。

「あつ……そうか。それがあつたな」

彼が思わず呟くと、少女は心底軽蔑したという目でこちらをじとつと睨む。溜息をつき片手を上げ、尖らせた口調で、

「まずはそこじゃないの？家に突然焼けた鉄が降ってきて何もかも埋められて焼け死んだ拳句標本にされるのよ？」族郎党卵まで皆殺しにするんでしょ？そのとき外に働きに出て、ごはんを持ってやっと家まで帰ってきた蟻は……いつたいうどうなってしまうの？あまりにもひどい話じゃない？」

「ごめん……ちよつとそご感覚が麻痺してた」

苦言を頂きトワイライトは素直に己の非を認めた。居心地悪く首をすくめる。

昔から、鼻に命じられて蟻の巣を穿つたり水責めにしたたりあれやこれややっていたのであまりそのあたりは考えていなかった。そういうえば最初は蟻が気の毒だという真つ当な感性も持っていたような気がする。だが己の安全と物言わぬ虫とを天秤にかければ、どちらが重いかはやがて決まりきったものになった。濡れぬ先こそ露をも厭えとはよく言ったものである。トワイライトが心の中で今まで蹂躪してきた蟻たちにごめんと謝っていると、

「別に普段蟻について特別なにか思うわけじゃない……ただ今回はあまりにも、興味本位での惨すぎる虐殺、いえ一族の殲滅よね。それはどうなの」

腕組みした小夜啼鳥がますます渋い顔をしていた。睨まれて気まずいながらも彼がなにかフォローする前に、

「使うのは鉄じゃなくてアルミニウムだけど、それでも温度は最低でも約六六〇度以上あるからね！坩堝を使用するなら八〇〇度くらいかな。蟻は間違いない全部気化するよ。苦しむ間もないから大丈夫！」

イドが横から口を開き、邪気のない確かな口ぶりで請け負う。小夜啼鳥がぎょつとした声を上げている。

「気化!?」

イドは陽気な仕草で両手を広げた。笑顔は爽やかだった。なんの憂いもなく、断言する。

「跡形もなく消えるのさ！」

「だからなんだっていうのよっ！」

言うが早いか小夜啼鳥の右手が霞み、平らな床にモップでも倒したときのような鋭い音が響いてイドがぶつ倒れる。トワイライトは遅れて足元に転がって来たものを拾い上げた。テーブル上の籠に入れてあつた殻つきの胡桃。小夜啼鳥が主人にぶん投げたらしい。かなり硬く高い音がしたがどこに当たったのだろうか。多分、頭だ。

「……おーい。大丈夫か。生きてる？」

「……死ぬほど痛いんだがなにを投げられたのだろうか」

とりあえず、屈んでつついてみると譚言^{たんげん}めいて返事はあつたので安心する。脳天に風穴が空いて脳味噌がこぼれていることもなさそうだ。髪をどけてみると、右の額^{たまた}からこめかみのあたりに小さく裂傷があり、粘り気のある真つ黒な液体を少しだけ零している。骨まで達しているのかはよく見えなくてわからない。まあ口もきいているし、大丈夫と判断できるに違いない。

この女の体内^{なにか}を流れる真つ黒い水、これも自分が彼女に惹かれぬ理由のひとつだった。綺麗な首をした若い女といえ、極上のワイン瓶のようなもので、なんの術^{わざ}もなく言ってしまうは、ああ美味そうだなあと思ってしまう瞬間がどこかに必ずある。それは日によって程度の差はあるが、しょつちゅう心に湧く素直な感想と強い衝動だった。

そしてそんなものは人間には間違いでしかない。考えてはいけないことだ。

赤い血が流れないイドは、どちらかといえは彼の同類のような感じで、少なくとも食べ物とは思えない。だから美人の割りには全然そそられない。嘔み付いてみたいという衝動の対象にはならないので幸いだった。そのあたり、ある意味で男女の垣根を越えて気楽に話せる理由にもなっている気もする。まあ、本人の性格が変だというのが一番の理由には違いないのだが……

「おし、生きてるな。ならまあ気にすんなや。見ると余計痛くなるぞ」

「石かなかかか……しかしさすがにそこまではされなれないと思いたいのだが、あれ、なんの話をしたっけ」

軽く目を回しているイドに肩を貸して起き上がらせてやると、つかつかと小夜啼鳥がやってきてその前に仁王立ちし手を伸ばした。

室内は暖かいので外套^{がいとう}も上着も脱いで、現在のイドは男物のベストに女物の立て襟^{たてえり}のブラウスを合わせ、首には白のスカーフを巻いた格好だった。タイピンはピアスと揃いに見える鋭角的な石。そのスカーフをぐいと掴んで小夜啼鳥が引つ張っている。小柄な少女の顔の高さまで無理矢理屈^かまされているイドの姿を見ていると、彼女が毎日なにかしら首に巻いているのはこの用途の為なのだろうかという疑惑が発生する。

「蟻が気の毒よ。なぜ謂^{いわ}れもなくそんな仕打ちを受けなければいけないの」

鼻先できつく抗議を受けたイドが情けない面持ちでこちらを指差す。

「蟻の巣の標本を作りたいとこの男が」

「お前が言い出したんだろ！人のせいにすんな！」

「今日持ちかけてきたのは貴様ではないかなにをひとり良い子ぶろうとしている！」

ぎゃあぎゃあ言い合っていると、小夜啼鳥が不審げに眉^{まゆ}を顰^{ひそ}めて呟いた。

「……なんか今日割と仲良いですね。連帯感があるというかふた

りとも同レベルというか」

「ないないそれはないから」

即座に否定すると相手も同時に同じ事を言っていた。むむ、とますます納得できない様子で小夜啼鳥は口を尖らせる。一旦イドを解放し、ばんとテーブルを平手で叩く。

「とにかく私は！そんな無意味で可哀想なことはいや。必要に迫られているわけでもないんでしよう。なら、蟻にだって、自分のおうちで平和に暮らす権利があるはずよ。それをそんな残酷な方法で皆殺しにするなんてひどい」

こちらふたりを纏めて睨んで怒った顔で少女は言い放った。実に正論だった。

小夜啼鳥は苛立った嘆息を挟み、更にトワイライトをじろつと見やる。

「男の子ってなんでこういうことすぐ考えるの。蟻の巢に水入れたり棒でほじったり……カエルとかトンボにもすぐひどいことするじゃない。ほんと、ろくなこと考えないんだから」

「いや、小夜ちゃん様、考えたのはこっちの姐さんでな」

確かに言い逃れはできないがせめてもの責任逃れの努力として彼がイドを指差すと小夜啼鳥の尖り目はそちらへと移った。

「戯れに蟻を焼き殺し家を奪い喰いものにするのは楽しいことですか？」

問われてイドは、多少決まり悪げにしていたが、
「いやそれは結果そうなるというだけの、過程におけるただの付

随物というか……我々の今回の目的はあくまで、巢の型取りであって」

「罪もない勤勉な蟻たちには何匹でも焼け死ねど。家も奪って」

そう言われれば、すかさずいいところに話が落ち着いたという顔になつて悪気ない笑みでひとつ頷き言った。

「まあ、みんな気化したら、家はいらないよね」

「なによ！可哀想じゃない！そんなひどい話っておかしい！おかしいわよ！」

痲癩めいて怒鳴りつつ、げしげしイドを蹴っ飛ばしている小夜啼鳥を止めるべきか否か迷いながらも、矛先がこっちに向いても怖いので結局はトワイライトは諦めた。せめて胸中で死者への祈りを呟いておいた。

雨音は静かに、家の屋根を叩いていた。

「……ナイチンゲールよ」

しばらくは椅子から落ちて蹲ったところをぼつこぼこに殴る蹴るされていて死んでいたイドだったが、やがて立ち直ってまた椅子に座り直していた。娘の方を見て、困った顔で声をかけている。

「少し機嫌を直してくれたか？」

小夜啼鳥は振り返らなかった。

暖炉の前に敷いた敷物の上で膝を抱えて拗ねたまま無愛想に呟く。炎の照り返しを受け、髪の色が普段とは違って見えた。

「あなたが蟻の巣にひどいことをするのを諦めたのなら」

イドは立ち上がって彼女へと近付くと、少し身を屈めるようにして多少神妙な顔をして話しかける。

「んー……それなんだけど。考えたんだよ。たとえば、事前に準備しておいてだね、狙った巣の中の蟻……成虫幼虫蛹卵に至るまですべて、生体は外に出し巣の中はカラッポにするとしよう。ここにアルミを」

がばつと怒り顔で振り返った小夜啼鳥が拳を振り上げそれを遮った。

「いきなり外に放り出された蟻たちはどうなるのよ！家財一式取り上げられて卵まで抱えて！行く先もないのよ!?死んじゃうだけじゃないですか！」

「だからアルミの熱で気化した方が一瞬で……」

「死んじゃえバカ！蟻が可哀想！」

またぶん殴られているイドを見て、トワイライトはひとり溜息をついた。

「まずいの話を聞かれました」

足拭きマットの方がまだ手加減されていると思えるくらいにこてんぱんに踏まれたイドが、背中をさすりながらうんざり顔で呟いている。その程度で済むあたりこの女も大概頑丈だと思いがら、トワイライトも応じた。

「女子はこういうの嫌がるからな。小夜ちゃん生き物好きだし

な。蟻の巣に溶岩流すつっーのはさすがに認められんかったか」

そういうえば三十分くらいつ伏せたまま動かなかったがあれはひよつとして背骨でも折って死んでいたのだからかどうでもいいことを考えつつ、

「しかも純然たる遊びだもんなあ」

彼がぼやくと、イドは拳を握つてがばつと顔を上げた。囁み付いてくる。

「なにを言うう！これは知的好奇心の探求であって、単なる遊びと言われてしまつては不愉快だ！くそう、あれだつて見れば必ず驚くはずなのに」

口惜しげにする彼女の話を途中で遮り、呆れ声でトワイライトは片手を軽く振った。

「いやまあな、蟻が可哀想つっうのは、わからんではないよ。一匹二匹じゃなくて巣の殲滅だもんな。普通の感性だわな」

「未知を暴くなら犠牲はつきものなのだ。身を捧げた蟻も本望だろう」

「しまった、こいつそもそも人を人とも思わぬ犯罪者なんだつた。つい引き摺られて危険思想に染まりそうになっていた」

真顔で即答されて洗面になり顔を押さえる。対する彼女は心外かつ話の通じない相手への憤りを隠せないという態度で、

「人間の話は今していない！蟻の話だろうが！別ににも火山麓の街を」

なにか明らかに不適切な例というか、段違いに危険なことを言

い出そうとしているイドを再度途中で制してトワイライトはその鼻先へと右手の甲を向けた。目は他所へと向けたまま、ぼそつと囁く。

「なんか方法考えようぜ。せつかくこまで計画練ったのによ。頓挫って悔しいじゃん。なんか抜け道ねえの」

イドは一度見損なつたと思つた相手を再評価した顔になつた。

「悪くないぞ。貴様にしては気骨があるではないか」

「まあ……見たいわな。蟻の巣」

「そうだろうさうだろう。お前いつもの調子でうまいことあれを丸め込めんのか」

「いや今明らか俺らが悪いからな……さすがに小夜ちゃん可哀想たる良心が痛むわ。お前ひどいな」

「なにをこそ言つてるのよまだ諦めてないの」

割り込んできた声にぎくつとして振り向く。横ではイドも似たような仕草をしていた。台所の隅でひそひそ話していたのだが、聞き咎められていたらしい。小夜啼鳥がむつすりとな機嫌な半眼になつて立っていた。ついさつきまでは怒つた顔で黙り込み、暖炉の火を眺めたり、火掻き棒でついたりしていたと思つたのだが。

少女は腰に手を当て、こちらを纏めて睨んでいた。だがどちらかといえはイドの方に比重が掛かっているような気がする。彼女が主犯だと判断したらしい。幸いだが、しかし次に怒らせたらこちらも殴られないとも限らない。

どうしたものかと彼が考えている間に、悪巧み主犯の方もなにが思うところあるようだった。喋らせるかどうかは迷つたが、しばらく考えを練つてのことに見えたのでまあやらせることにする。邪魔をしなければ、イドは必ず喋り出す。今だつてそうだ。まあ邪魔をしたところでどうせ話すのだから。

そんな女は、生真面目に落ち着いた眼差しで娘の方を見て、静かに声を発した。

「蟻に……必要以上の思い入れというか、擬人化の必要はない。あれはああいう生き物だ。別になにか考えているかと言えはそうでもなく……我々のような思考をしているわけではないから、今日も頑張つてみんなの為に働こうとか、子供がかわいいとか、素敵なおうちで一家楽しく暮らせて幸せだなあとか、そんな具体的なことを考えているわけではない。ただ本能に従い行動しているだけの単純かつ精密な機械のようなもので」

「機械にだつて心はあるのよ！馬鹿にしないで！」

そこまで来たところで、一応は黙つて耳を傾けていた小夜啼鳥がぼんと床を踏み鳴らした。イドが狼狽する。

「いや違う……そんなことを言つたわけではない。あのね」

「なによなによなによ！御立派な脳味噌がなきやなにも想えないつていうの？そんなのただの肉の塊じゃない！金属と肉と、どつちが偉いつていうのいつ誰が決めたの！なんで機械は可哀想じゃないの？どうせなにも考えてない、なにをしたつてなにも感じやしないつてどうして決めつけるの？決められた通りに一生懸

命働くののなが悪いのよ！なんにだつて魂は宿るわよ！蟻だつて、家族の為に頑張ろうって思つてるかもしれないじゃない！」「ああああ。ごめん。違う。そういうことを言っているわけじゃないんだ。違うんだよナイト」

「なにが違ふのよ！御母様の馬鹿！！」

「てめ火に油注いでんじゃねーよ！積極的に煽つていくスタイルか」

なにやら人間関係に深刻に亀裂を入れ始めたように見える親娘の間に割つて入りつつ、トワイライトはとりあえずイドを怒鳴りつけた。相手は悲壮な面持ちで両手を胸の前へ上げ、

「説得したかったのだ！！」

必死の声音で叫び返してくるがなにを言ってるんだこいつとしか思えなかつた。なぜ見えている地雷を踏みに行くのだろうかこの女。

「頭がおかしい！最初っから殺す方向に持つていつてどうすんだよ！それは嫌だつて小夜ちゃん終始言つてんだろ！」

「だから誤解を解こうと」

「蟻は殺したらいかんのだろ！そこはこの子譲らんだろ！見てわからんか！」

あまりにも根本的すぎるところから解きほぐそうとしている女に頭を抱え、彼が小夜啼鳥を後ろに庇うようにするとイドは焦りつつも相変わらず糞真面目な顔で言い募つた。

「別に私だつて好き好んで蟻を殺したいわけではない！這つてい

れば可愛らしいと思うし、行列を見れば勤勉だと思う！だが今はまた話が別で」

「割り切りすぎだろ！ここまで言われたら普通倫理を振り返るというか……泣いて嫌がる子供に嬉々として生き物焼かせる親つてもなんなんだ。そこは学術的思考云々を引つ込めてまず優しさを汲んでやれよ」

「泣いてない！」

「ごめん。わかってる」

「言葉の綾だ。そうすべてはそれだ」

顔を真っ赤にして涙目の小夜啼鳥がそう怒鳴るのに即座に謝りつつ、トワイライトとイドは冷や汗混じりでお互いにお前が悪いんだぞと爪先で蹴り合う。

そんな大人には委細構わず。滲んだ涙を拭い、ぎりりと歯を噛み鳴らし、昂然と頭を上げて小夜啼鳥は宣言した。

「とにかく！私は蟻の方につくから。そんなに面白半分は蟻を皆殺しにしなければ、私を倒してからにするのね」

「最悪の用心棒が蟻の巣についた信じられないどういふことなのだ」

「お前のせいだぞアホ！」

口を手で覆い、瞠目して慄き眩くイドを肘で小突いてトワイライトは小声で叫び、また溜息をつくしかなかった。騒がしいのは家の中だけだ。雨は相変わらず、当分、止みそうになかった。

完全に臍を曲げた小夜啼鳥は、あれから一言も口をきかず、出された菓子にも口をつけず腕組みして机の上だけ睨んでいる。時々脚だけ組み替える以外は置物のように沈黙している。目つきは据わっており睨みつけられたままの蟻の巣の見取り図がそるそる焦げるのではないかと思えるほどだった。

とりあえず、できることとして、手つかずのお茶が冷めたらさりげなく淹れ替えて出し直すことだけ繰り返していたトワイライトだったが、三度流しに捨てたあと気まづくなつたのか少女からもういいと声をかけられた。

不機嫌そうに小声を発した小夜啼鳥は、目を上げぬまま新しいお茶に砂糖を二杯入れて、掻き回す。彼が温め直したミルクも差し出すと、無言で受け取ってカップへと注いだ。ゆるゆると回る渦巻きを眺めている。

僅かに空気が緩んだのを感じ取ったということなのか、それとも単に今なにか思いついたというだけなのか。机に両肘ついて、顔の前で手袋越しの指先を合わせてじつとしていたイドが重く口を開いた。

「……蟻の献身に感謝し……巣の跡地に半永久的に残る慰霊碑を」
「もうお黙れ」

トワイライトは向かいから消しゴムを投げて戯言を途中で遮った。

「生命の尊厳を認め尊重したのに」
「そういう問題じゃねえ！あと俺んちの庭にへんなもん作るな」

「馬鹿なんじゃない」

もうどうすればいいのかわからないといった顔で呻いているイドに即座に突っ込みを入れるトワイライト。小夜啼鳥が心底うんざりしきった顔で呟いている。

彼もそれに倣って呆れ顔になり、はあ、と嘆息してから、真顔の馬鹿に当たって飛んでいった消しゴムを拾いに席を立った。

ついでに、窓の外を覗く。雨降りならば梟はうとうと一日中眠っている。時にいればそのままだし、この家にいれば好きなかげ彼のベッドを占拠して眠り込む。こちらとしては溜息ひとつついて、丸まっている彼女の脇に潜り込むだけである。まあ普段と変わらないといえ、変わらないのだが。

ふっと、濡れそぼって立っていた横顔を思い出す。彼女は自分がいない間、雨の日も雪の日もずっとああして立っていたのだからか。眠りもせず。唇を寒さに震わせていた真っ白い顔。凍り付いたように美しく、しかし寝れて明らかに死と絶望に病みついていた。幽鬼のような佇まい。

今はもうそんなことはないのだ、と己に言い聞かせる。かぶりを振ってトワイライトは陰鬱な思い出から目を背けた。梟の屈託ない笑い声を思い出す。それは意識しなくても身体はどこかに貼り付いているようなものだった。耳に蘇る彼女の声に、どうして梟は今ここにいないのだろうかと唐突に訝った。有り体に言え、すこしだけ寂しかった。客が帰ったら、時に様子を見に行く。そう思う。

本調子で彼女がここにいれば現状は三対一になるのは確実であり、小夜啼鳥が大噴火するに違いないので彼は良識的大人の立場にならねばならぬはずだった。そもそも、こんな話自体持ち掛けなかつたような気もする。そろそろ諦めるべきなのだろうか。兩粒を眺めてそう考えながら片手で消しゴムを放り投げたり受け止めたりしつつ食卓へと戻ってくる。

親娘は黙り込んでいる。イドはぼったり机に伏せて動かない。また殴られたのかもしれない。小夜啼鳥は目を三角にしてそれを睨んでいた。食卓の上には小さな拳が載っており、更に左手は胡桃の籠に突っ込まれ中身を鷲掴みしている。さて利き腕が拳骨であることと、逆腕が飛び道具を握っていることについてはどちらがどう手加減をしていると判断すべきかともいいたくないことを考える。右手で礫を投げないだけかということなのか、それとも死角を補いフル装備だと考えるべきなのか。なんであれイドはくたばっており静かだった。そのまま死んどけと思いつつ、横を通り過ぎる。

椅子を引き、腰掛けて、腕組みした。天井を見る。雨漏りについて思いを馳せる。本が濡れるのは、確かに嫌だった。

「……蟻を全部……卵からなから、外に出せるって言ったな。それは本当？」

やがて静かに彼がそう言い出すまで、食堂は兩音の帳に包まれていた。イドは動かなかつたが、いつも通り即答してきた。ごく普通の声で。

「まあ、やればできる。また有りものでの正攻法を練つてもいいがさすがに難しいかな？毎度ながら反則というか、私の常套というか、世界を改竄すればそれくらいは容易いが」

「路頭に迷つた蟻は——」

「いや、それでな。その改竄なんだけどき。そこまでやるならもう一個蟻の巣作れねえの？」

「ん？」

その途中で小夜啼鳥がまた苛立ちの声を上げるが、トワイライトはなるたけ落ち着いてそれを遮つた。イドがむくつと起き上がりつつこちらを見る。

指を立て、二人の視線を集めてから、それを動かす。紙の上の蟻の巣へと。

まずひとつめ。ぐるつと指先で囲む。

「家財道具一式含め、蟻を外に出す。蟻の巣の贋作——複製を作る。そこに蟻を入れる。空になった巣を俺たちが頂く。それでいい？」話しつつ、隣の絵を指差し、また指で囲み、ふたつの間を行き来してみせるとイドはこともなげに頷いた。

「できるよ」

「それでどうだ」

彼女は座り直し、背筋を伸ばして腕組みした。顎に手を当てて、素直そうな顔つきで天井を仰いでいる。

「まあ多少面倒だがアリではなからうか。蟻だけに。その方法ならば我々も蟻もさほど失うものもなく済む。巣の位置がずれば

多少、餌場への距離感が狂って戸惑うかもしれないがな。まあすぐ慣れるだろう」

「よしどうだ小夜ちゃんー」

勢い込んでトワイライトは小夜啼鳥へと向き直った。ぐっと拳を握って期待の目を向ける彼を胡散臭げに見つめ、少女は釈然としない面持ちで首を捻った。呟く。

「……それは、蟻を移す必要があるの？複製に金属を流せば同じものが」

「なにを馬鹿なことを！お前はなにもわかっていない！そんなことに一体なんの意味があるのだ！」

「ロマンがない！それじゃ意味ねーだろ！」

訝しげな反論を遮りイドが大声を上げている。左手は拳でどんと机を鳴らし、右手で小夜啼鳥を指差して。この女すぐ人を指差す癖がある。しかしそれを咎め立てするより早くトワイライトも小夜啼鳥へと食ってかかっていた。イドとほぼ同時だった。異口同音に弁駁の意を示されて小夜啼鳥が怯む。意味不明の存在を見る目で眉根を寄せてこちら二人を纏めて見やり、戸惑い気味に呟いている。

「な……なによふたりして……馬鹿じゃない？」

「本物に金属流して型取るから面白いだろ！でなきややる意味ねーよ！そうだろ姐さん！」

彼がイドへと向き直ると、彼女は真顔で大きく頷き小夜啼鳥を指していた指先をこちらへと向けた。

「その通りだ！貴様今日はなかなか物分かりが良いぞ！必要経費として渡したはずの金を、準備すべてこちら持ちとなったのにさっぱり返す気配を見せんのが若干腑に落ちんというか気になっていたが、もう追求しなくても良いかという気になってくる！」

「シヨバ代！あと蟻の巣代！そっちも物分かり良いこうぜ！もういいじゃん今度いいお茶買つとくからそれで還元すつから。釣りはくれ」

彼も真剣な顔で力強く応じていると小夜啼鳥が呆れと怒りが九分九厘のうち半分半分、残りの僅か一厘でもしや自分が間違っているのだからかとぐらついているような声で叫ぶ。

「蟻の巣は蟻のものでしょーあんたが元締めつておかしくない!?」

「蟻から家賃取つてんの俺んちの庭だから」

トワイライトがささず答えると、少女はますます眼差しに含む懷疑の色を強めた。ただし自己ではなくこちらへ対しての。

「ここはそもそも梟の森では」

につこりして、自分の顔を親指で示し、トワイライトはなんの気負いもなく言い切った。

「つまり専門用語で俺のものって意味さ」

イドがこちらを指差したまま真顔で言っている。

「娘よ。こういう男を、俗語で紐と言つ」

「ヒモじゃねーよ」

とりあえず言い返しておいたが、小夜啼鳥の顔を見る限り、どちらの言を信じたかは疑う余地がなさそうだった。

雨は止みそうにない。



数日を経て、よく晴れた日にトワイライトは庭へ出て無数の小さな穴を覗んであれこれ悩んだ。気になるものには時々色分けした小さな旗を立てておいたり、蟻が大きいのと小さいのではどちらがいのだろうかと迷ったり、鼻になにやってるのなにやってるのと聞かれて目星を付けた巣穴を破壊されないよう苦勞したりした。

忙しく出入りする小さな虫の種の同一性と勘から、これとこれは地下で繋がっているのではないかと思えた穴を除外していき、最終的にみつつまでは絞れたが、そこから長かった。よく見ればそれらはすべて蟻の種類が違った。こうなると名前が気になつてきて細かいことが書かれた図鑑が欲しかったが、そんな高級なものには残念ながらこの家にはなかった。次に強請るものが決まった。

とつくり考え、あみだくじまでやったが、最後には結局また勘に頼った。赤みがかつたやや大きめの蟻を選んだのは、彼らもつとも勤勉なように見え、大胆に遠くまで歩いて行くように思えたからだ。無論どの蟻もよく働いていたが見た範囲ではそんな風に思えたのだ。独断と偏見で、被害者宅は決まった。

同じ巣の裏口だと覗んだ複数の穴はかなりの距離を隔てて口

を開けていた。これももしすべて繋がっているのだとしたら、周囲の土ごと空間を抉り出したら庭はどうなってしまうのだろうか。小夜啼鳥に配慮し、穴掘りしても他の蟻の巣には影響がないと思われるものを選んでみた。いつの世もはみ出し者というのはすぐ虐めの目をつけられて割を食うものなのだ。

しかし本当にあの穴とこの穴は繋がっているのだろうか。確認のため水を入れて反対側から溢れるかどうか試したいという衝動を抑えるのにむずむずし、トワイライトは苦心してひとりそれを宥めた。そのころ鼻は壊せない蟻の巣にさつさと飽きて、どこからか捕まえてきて躊躇なく首を捻った小鳥を頭からばりばり齧っていたが、いつものことなので放っておいた。

こちらにも勧められたが、丁重に断った。実を言えば周囲に漂う赤い血の匂いはさっぱりと甘く、そう悪いものでもなかったが、人間は断じてそんなものを齧ってはいけなかった。いつものことなので鼻も慣れており食いがりはしなかった。おかしい話だよ、と呟いて鳥の羽を噛み砕いていただけだ。トワイライトは黙って干した杏子を齧り葡萄酒を啜った。

巣の入り口には細かい砂が山になって積み上げられていた。屋根のない家。彼らは雨の日にはどうしているのだろうか、とふと疑問に思った。

今度どこかの暇な女に聞いてみよう。

それから更に数日が経ってから。

封筒が机の上に出現したが、今回は普段の回りくどい文章ではなく、ただ一文字『決行』とだけ記してあった。トワイライトは黙って顔き手紙を暖炉で燃やした。こんな時にはそれが適切に思っただからだ。なおこの手紙は開封後自動的に消滅する、と胸中で付け加えつつ。なんであれ、証拠は残さずだ。

それでよしと変な女がしたり顔で頷いたような気もした。

梟を連れて、井戸端に出た。外はひやりと寒いがよく晴れていた。もっと冷え込めば春まで蟻は姿を見せなくなるが、今はまだ懸命に蓄えを集めている時期のようだ。基本的に温暖なこの国の冬は短い。トワイライトは寒いのが嫌いなので、早くから暖炉をつける。梟は火が好きなので喜んで眺めている。室内が暖かければ無論裸だともうどうでもいいやと思つて彼は放置している。それでもイドが来るとなれば服を着るので大したものである。そこについてだけはいつも、トワイライトは内心で舌を巻いている。

その日のイドは作業に備えてか、珍しく髪をシニヨンに纏めて前掛けまで準備してきた。だからどうだというものではあったが、まあいかにも場慣れして頼もしげには見えた。彼女の指揮であれこれと動いた。

イドは物々しく装備を整えてきており、庭に金属製の小型炉を設置して得体の知れない燃料を使つてがangan火を焚いた。二重になって赤熱した器の中で、未知の金属は銀色のスूपのように滑らかに蕩けた。それをこつい軍手を嵌めたトワイライトと小夜

啼鳥の二人がかりで持ち上げて、無人となった巣穴にそろそろと注いだ。

相手の小夜啼鳥はといえば、今日は最初から土木作業が決定している為か、こちらも珍しい格好だった。髪はイドと揃いにきっちり纏め、軽装の執事服めいたものを身に纏っていた。澄ました顔は普段と変わらないのだが、白黒灰色の男装姿だと確かにどこか少年めいて見えこちらも新鮮味があった。膝上までのズボンの丈と、ふくらはぎまでの黒い靴下とその間に存在する紳士用靴下留めの三点が織り成す絶妙すぎる位置関係が今回の拘りに違いなかった。相変わらずの気韻と芸術性を誇る脚だった。制作者は有罪。

穴を埋めた金属が十分に冷えて固まるのを待ち、イドの命令で小夜啼鳥が危なげなくシャベルを振るった。

最初は足をかけてがangan周囲を大胆に掘り進め、やがて小型の移植ごてに持ち替えて慎重に掘り出す。その頃にはイドとトワイライトも加わっていた。梟はぶつ壊しの名人なのでうまく言い含め穴の上から野次だけ飛ばさせることに成功した。そこは自分の得意分野だった。

しかし見事な手際での穴掘りだったので、トワイライトが感心して小夜啼鳥を褒めると、少女は笑うでもなくただつんと鼻先を上げて、自分は手練れの墓暴きであり穴掘りのプロだと囁いた。鼻の頭に泥がついていた。

掘り出された巨大な土と根と金属の塊をそつとまた二人がか

りで持ち上げ（身長差があるので本来はイドとトワイライトの方がいい気がするのだが、彼女は非力なので今一つ役に立たず最初から偉そうに腕組みして指揮官役に収まっていた）、井戸から汲んできた水でそっと壊さぬように洗い流した。

なおここでもっとも苦勞したのは、鼻に邪魔をさせないことだった点を付け加えておく。

何度も水をかけて丁寧にブラシで擦るうちに、やがて明るい銀色の複雑な形状をした物体が姿を現した。曰く言い難い奇妙な、しかし機能的な美しさも持った形だった。イドの描いた図のどれとも一致はしなかったが、確かに同一の法則の元に存在するものと判断でき、すくなくともかけ離れてはいなかった。絵の腕前の問題ではないとこれで証明された。

他の巣を掘り出して調べたわけではないからこれが一番だと断言はできないが、非常に大きくユニークで、素晴らしい蟻の巣だった。一番である可能性は十分にあった。

イドは満足げに目を輝かせ、散々巣をいじくりまわして解説を入れた後、このもつとも大きくユニークで素晴らしい巣を選んだのはトワイライトであり、今日のこの結果、これは彼の功績だと言いつつ讚えた。そう言われればまあ、悪い気はしなかった。彼はポケットに片手だけ突っ込んで、二番目はあそこで三番目はあれであると落ち着き払って示したが、小夜啼鳥がなぜそこまでやるのかと言いつつ出したので素直に諦めた。イドは多少、もつとやりたそうな顔をしていた。小夜啼鳥が焼けた炭を火ばさみで

拾って、怖い顔で突きつければ黙ったが。

それはそれは面白かった。トワイライトは非常に満足し、蟻の地下都市の全容を心ゆくまで眺めて感慨に耽った。

父にも今日の騒ぎを見せたなら、馬鹿馬鹿しいと白けて家に引っ込んだか、それとも案外乗り気になって参加したりしただろうか。わからない。ただ、悪ガキとしては最高の充実感だった。

鼻も相当な悪ガキの親玉だが、やることは低次元かつ雑な暴力で片付く範囲のことに限られる。あれこれ凝って計画を練るような、この手の捻ったことをやらせればイドの右に出る悪ガキの王者はいないとわかった。王者というより、悪の博士とかそんなところであろうか。あまりにもハイレベルかつ頼もしく輝いていた。

トワイライトの中の万年誰かの子分的悪ガキの心はすっかり悪ガキの王者たる彼女に感服しており、すべてを終えて片付けの際、弟子にしてくれとつい口走ってしまった。悪ガキの王者は鷹揚に頷き、物分かりがよく暗算の早い弟子ならいつでも歓迎すると言った。

よって、こうしただけならイタズラや化学実験や模型製作などの悪ガキの魅力を放つ分野においては、トワイライトは悪の博士の弟子となりたまに面白い目を見せてもらっている。鼻は死ぬほど喜ぶ。小夜啼鳥はだいたい、呆れている。

そんなわけで、彼の家の庭には、珍しい形の珍しい金属が眠っ

ている。

削るなり、もしくはこのまま芸術品や学術品として売りに出せば、一財産になるのかもしれないが、立派な巣を提供してくれた蟻たちに敬意を表して、これからもずっと、埋めたままにしておこうとトワイライトは思っている。

蟻たちは今日も勤勉に、働き続けている。